

# ドイツ語初級文法記述再考（2）

—動詞のふるまい—

Eine Revision der deutschen Grammatikbeschreibungen für Anfänger (2)  
— Das Benehmen der Verben —

宮 永 義 夫  
Yoshio MIYANAGA

## ドイツ語初級文法記述再考 (2)

### —動詞のふるまい—

#### Eine Revision der deutschen Grammatikbeschreibungen für Anfänger (2) — Das Benehmen der Verben —

宮 永 義 夫

Yoshio MIYANAGA

#### 1. zu 不定詞句の動詞的用法

中山豊は、その『中級ドイツ文法』(2007) <sup>1)</sup> において、「zu 不定詞句の動詞的用法」を挙げている。

Er verspricht ein großer Künstler zu werden. 「彼は偉大な芸術家になりそうだ。」

Es begann zu regnen. 「雨が降り始めた。」

「動詞的用法」は zu 不定詞句のみに設定されており、いわゆる原形不定詞 (句) に対しては、「用法」とはなっていない。「zu 不定詞句」の「用法」は 5 つあるとされ、「名詞的用法」、「形容詞的用法」、「動詞的用法」、「副詞的用法」、「独立用法」である。これに対し、原形不定詞のほうは、「さまざまな助動詞と」、「一般動詞と」、「名詞的用法」、「独立不定詞句として」となっており、「～的用法」として共通するのは「名詞的用法」だけである。しかし、「動詞的用法」とは本動詞が助動詞化することと考えられ、独立不定詞句は独立用法であるとも捉えられるので、「zu 不定詞句」に特有のものは「形容詞的用法」と「副詞的用法」であるといえる。zu 本来の前置詞としての働きから見て、zu 不定詞句が形容詞、あるいは副詞として働くことは理解しやすい。しかし、原形不定詞句に「副詞用法」に相当するものがないかどうか、あるいは、原形不定詞を含めて、「動詞的用法」と「副詞的用法」の区別あるいは重なりが、動詞のふるまいを理解する鍵になると思われるのである。

先の例文を不定詞句にすると、(ein großer Künstler zu werden) versprechen、(zu regnen) beginnen となり、( ) 内が例えば代名詞になれば名詞的用法であるが、この意味用法では非文になる。\*Er verspricht es, ein großer Künstler zu werden. \*Es begann damit, zu regnen. 第一の文を成り立たせるには、意味用法を変えて「彼は偉大な芸術家になると約束する」とすればよい。いずれも全体の主語が外側の最終不定詞ばかりではなく、内側の不定詞にも関与している。これは外側が助動詞として機能し、言わば内側の Modus を表している。これはちょうど、話法の助動詞について、中山が「陳述緩和的用法」<sup>2)</sup> と呼ぶ形式と同じ構造を持っている。

Er kann Klavier spielen.

① Er hat die Fähigkeit, Klavier zu spielen. 彼にはピアノを弾く能力がある。

② Es gibt die Möglichkeit, dass er Klavier spielt. = Es ist möglich, dass er Klavier spielt. = Möglicherweise spielt er Klavier. 彼がピアノを弾く可能性がある。

②の場合を「陳述緩和的用法」という。不定詞句 *Klavier spielen* は、名詞句としてとまらず、主語を要求して、節になる。助動詞構文の主語は、実のところ、従属節内の主語に止まり、助動詞はその上位にある。この構造こそが不定詞に動詞性を与え、「動詞的用法」とも呼ばれる理由であるが、それは反対に、助動詞から動詞性を奪い、あえて言えば、「副詞的用法」と呼ぶべき用法になる。*möglicherweise* のような、いわゆる文修飾副詞に置き換え可能である。

②の文例には、*dass er Klavier spielt* という従属節を使用している。従属節を形成する従属接続詞は一般に、名詞節を作るものと副詞節を作るものに分かれるが、*dass* は名詞節を作る。②の最初の文では *dass* 節と *Möglichkeit* が同格と見なされる。節部分が名詞のパラフレーズとなっているので、これを「形容詞的用法」と言うこともできる。広い意味の名詞的構造の連続においては、主要部（ヘッド）が自ずから形成され、名詞核になり、その回りに形容詞性の付属体ができる。名詞、形容詞は相対的なものである。2 番目の文は、*es* を仮主語に置いた名詞構文であり、3 番目は文副詞1語に縮約している。同様に、動詞、副詞も相対的である。

*Er verspricht ein großer Künstler zu werden.* を助動詞構文で置き換えると、*Er wird ein großer Künstler werden.* か、*Er muss ein großer Künstler werden.* に相当すると思われるが、*werden* の重複使用は紛らわしいので、*müssen* を選択する。*müssen* の意味のふくらみを一瞥すれば、陳述緩和的用法以外では、「当然」や「義務」の表現である。助動詞の本質として、あくまでも（副詞的に）動詞の周辺に位置し、その意味では不定詞に動詞性を保たせたまま、名詞性を付与し、自らは動詞の人称変化などの具体的機能部分と、モード（話法）を担当している。助動詞があくまでも動詞で、不定詞句が主語を離れて普遍的に「偉大な芸術家になること」という名詞として扱いうる用法での *er muss* は「彼は～しなければならない」「彼は～して当然だ」「彼は～する義務がある」などとなる。*müssen* の場合、はたしてこの「義務」や「当然」の判断がどこから来るかが問題であり、主語 *er* だけに収まることはないが、構文的には不定詞部分を目的語とする SVO 構文と捉えることが出来る。一方、*Er verspricht ein großer Künstler zu werden.* 及び、陳述緩和的用法の *Er muss ein großer Künstler werden.* では、不定詞部分に主語が要求され、節になり、その上位に（準）助動詞が来る構造になる。ほぼ等価なのは、*Es ist sicher, dass er ein großer Künstler wird.* = *Sicher wird er ein großer Künstler.* などになる。左辺から右辺は、ただ縮約しただけのようにも見えるが、左辺は *es* を仮主語とする *dass* 節が主語の形容詞文であり、左辺とは大きく構造が異なる。それは *sicher* が述語形容詞と文副詞を兼ねることができる数少ない語であるからであり、むしろ希なことである。

*Es begann zu regnen.* を *\*Es begann damit, zu regnen* で置き換えられないのも *zu regnen* が名詞にならないという構造把握から見れば同じであるが、若干プロセスが異なる。そもそも *mit ~ beginnen* は前置詞付き目的語を取ることによって、他動詞に比肩するものである。強引に不定詞の名詞的用法に倣おうとすると、*beginnen* の目的語である他はなく、*beginnen* の主語は何か別のものである。ところが非人称動詞である *regnen* は、形式主語 *es* を伴う文の形でしか存在できず、名詞形はどうしても *dass es regnet* という節になる。従って全体は *Es begann, dass es regnet (regnete).* 当初の *es* は *dass* 節を受ける仮主語である。節であるので、*zu* 不定詞句への変換は節の主語を全体の主語としなくてはならない。非人称動詞の不定詞は、本動詞（助動詞）も非人称化して完遂するものであり、そのことはまた、非人称動詞の不定詞は「名詞的用法」にはならず、必ず「動詞的用法」である、ということの意味する。更にそれは非人称動詞の不定詞とは何かという問いも生じさせる。例えば、*regnen* という不定詞は、必ずしも非人称動詞ではない。不定詞にはそのような区別はないといってもよい。*es regnet* となって初めて非

人称動詞である。geben がそれ自体として非人称動詞ではないのと同じである。

この問題把握は、geben はその用法の大部分において人称用法であるから、非人称動詞という概念は埒外に置かれるということである。非人称動詞はあくまでも定形(定動詞)のときに出現する区分であり、不定詞のときにそのような区分はないとすれば、regnen においても同じであって、非人称動詞は非人称用法である。このように捉えることの意義は、言語の創造的使用を重要視することであり、価値観の問題である。まず実用的には全ての場合に非人称として用いられる regnen のような動詞に対して、非人称動詞という概念を与えることに不都合はないと考えるが、非人称動詞を相対化することに与するのは、そのほうが本質的だと考えるからである。分詞の形は、「不定詞+d、ただし seiend、tuend」ではなく、「不定詞の語幹+end、ただし -elnd、-ernd」のほうがよいと考えるのと同じ発想である。

残る問題は、beginnen のような非人称動詞(非人称用法)と共起する(準)助動詞の非人称化である。内側の動詞が定形になって初めて非人称性が明らかになることから、不定詞句は「動詞的用法」であり、このことは助動詞の「陳述緩和的用法」(むしろもはやこのような概念は不要かもしれない)と同様であり、本来は、例えば zu regnen beginnen のようなものは、zu 不定詞部が分離動詞の「前つづり」に該当するもので、副詞的であり、この不定詞句全体が非人称用法/動詞であると捉えなくてはならない。このような場合の、本動詞としての beginnen の主語は非人称のesに限られるわけであるから、その現象の直裁な表現として、非人称動詞としての beginnen という言い方もあって然るべきかも知れない。その他にも、主語が欠如する自動詞の中間態としての再帰表現や、受動態表現にも es が登場し、それらの表現と beginnen などの意味的に結合可能な(準)助動詞のふるまいと非人称的表現について、考察を進める必要がある。

## 2. 原形不定詞と zu 不定詞のふるまい

原形不定詞と zu 不定詞の相違は、文の本動詞の種類によって使い分けられているだけのように見える。助動詞ないし知覚動詞、移動動詞の場合は原形不定詞を用い、一般の動詞、準助動詞の場合は zu 不定詞を用いている。定形の動詞に他の成分が結合して出来上がったひとまとまりは即ち文であり、不定詞は不定詞句を作る。成分から見れば、文＝主語＋不定詞句である。不定詞句は、名詞句のように格変化を中心に密接に結合してはおらず、最も外側(最後)の動詞形成成分であれば、文から主語である名詞句(ないしはその代用形)を除いた部分全部がゆるく並んでいるだけである。動詞形成成分が二つ以上あると、内側の動詞形成成分は一部の担当ということになり、区切りを持つ必要がある。そのためコンマで区切ることが行われる。コンマで区切られた不定詞句につきものの zu 不定詞のそもそもの由来は、前置詞zuである。前置詞は名詞句の格機能を拡大し、目的格を大幅に拡充し、併せて副詞句や形容詞句として使い勝手を良くしている。zu の本来の意味は、接近、目的の場所を示している。そこから、目的・目標の副詞・形容詞「～するために/の」に用いられる。そこから zu 不定詞句の「副詞的用法」と「形容詞的用法」が生まれる。動詞性の語彙は概念語としては名詞に転換することが出来、更にその付属的部分である形容詞にも転換しうる。一方で動詞本来の付属的部分は副詞であり、副詞に容易に転換しうる。即ち、zu 不定詞は、不定詞を形容詞的用法、副詞的用法として使うための方式であり、それは本動詞の動詞性を残すということを意味する。反対に、原形不定詞は、その形容詞性、副詞性ははっきりせず、むしろ動詞性を残し、そのことは同時に本動詞を(準)助動詞化、すなわち副詞化していると、とりあえずは考えることができる。また、zu 不定詞は不定詞句をはっきり区切るためのものでもあった。それはとりまおさず、原形不定詞の場合は、切れ目(まとまり)がはっきりせず、

そのまま全体が連続する性質を持つことになる。

知覚動詞と原形不定詞の結合について中山の例を挙げる<sup>3)</sup>：

Der Zeuge sah den Täter aus dem Haus gehen. 証人は犯人がその家から出ていくのを見た。

この例では、外側の *sehen* の目的語の *Täter* が、内側の *gehen* に対しては主語に転換している。この構造を解釈的に言い換えれば、*den Täter, der aus dem Haus geht*, あるいは、*dass der Täter aus dem Haus geht*, に置き換えられるので、目的語＋目的補語（形容詞）の構造、例えば、*Ich finde den Hut gut*. のようなものと似ている。

この文型を *zu* 不定詞に置き換えるとどうなるだろうか。(?) *Der Zeuge sah den Täter aus dem Haus zu gehen*. 本来コンマで区切られるべきであるが、まずはどこが区切りであるかは不明である。*sah* の直後にコンマを挿入すると、*den Täter aus dem Haus zu gehen* となるが、これは *gehen* が 4 格目的語を取っている構造、即ち *gehen* が他動詞として振る舞っており、この用例では、ほぼあり得ない。どうしても、ひとかたまりは *aus dem Haus zu gehen* である。不定詞は直接には名詞に転換する。不定詞句であるが、句というものの基本は名詞句であるという言い方が出来る。名詞句は主語や目的語になるものである。そうすると本動詞 *sehen* が、不定詞句部分の格は不明ながら、二重の目的語を取って、*SVOO* 構文になっている。*zu* 不定詞句ならば形容詞的用法があり得るが、本来は名詞的用法であって、名詞が並列して、片方がもう一方をパラフレーズする説明的副次的関係になくなくてはならず、*den Täter* のような人間を表す語を形容することはできない。知覚動詞を使用した目的語を主語とする意味上の副文の入れ子構造を表現する *SVOC* 構文には背理法的にも原形不定詞句が主文との切れ目なしに使われることが見られる。

*SVOC* 構文を固定化し、言わば *CV* を熟語化して成立しているのが分離動詞である。先の *Ich finde den Hut gut*. は *SVOC* 構文の典型例であるが、知覚動詞構文も基本的にこの構造を踏襲している。例文の不定詞句 *den Hut gut finden* の *gut* と *finden* が何らかの条件によって繋ぎ書きされれば分離動詞となる。この場合、*Der Hut ist gut*. コプラ動詞による *SVC* を含んでいるので、*SVOC* 構文となり *gut* は形容詞と見なされるが、副詞であっても構わない。*Er liest den Text laut*. 「彼はテキストを大声で読む。」一般的に代名詞→副詞→名詞の順で前から後へ向かう語順が推奨されるが、条件を満たせば、入れ替え可能である。*den Text laut lesen* は副詞 *laut* が名詞より後、即ち、より動詞本体に近い重い位置を占め、核を形成している。*aufstehen* などの分離動詞は、このような不変化詞が動詞に取り込まれたものである。動詞が必要な外部要素を集結させると文になるが、文は要素がただゆるく並んでいるだけである。分離動詞の観察から認識されうるのは、文の究極の姿は、分離動詞のように語として結合してしまうことである。現在も議論されているが、*VV* の *spaziergehen*、*OV* の *radfahren* や現在も生きる *teilnehmen*、*OV* あるいは *CV* の *leidtun*、*CV* の *schwerfallen* など分離動詞こそドイツ語の文型の究極の姿であるとも言えそうである。動詞成分は末尾に格納されているが、文として活性化されると、切り離されて前方へ移動する。最も前へ出ることもあるが、多くの場合（平叙文）、その前に一つの文成分（前域）を置く。動詞以外の成分は、動詞に結合しようとする力が働くが、名詞句内の「性数格変化」は語尾変化を伴って個々に離れる傾向がある。それぞれに修飾・被修飾関係が生まれ、斥力が働いている。そのような程度ばらばらの状態で並んでいるのが文である。

文を構成する文成分としては、名詞句（一部は前置詞句）が主語、補語、目的語として動詞に接続し、本来の副詞、並びに名詞句、前置詞句の中に副詞的に動詞を修飾するものがある。即ち文は動詞を中心に名詞的と副詞的という2つのあり方で動詞と結び付く成分で出来ていると言える。Rad fahren は、かつて radfahren と書かれたように Auto fahren でも Klavier spielen でも同じ構造であって、繋ぎ書きは可能なのである。現象とすれば、名詞性を失ってゆく、具体的には冠詞等がなくなり、固定した表現に限られてくると、動詞の一部（副詞）と見なされ、最終的には分離動詞となる。gut Klavier spielen では、一応 gut が副詞的に修飾し、Klavier が目的語として名詞的關係である。一般的に副詞的修飾が前であることから、この順序で共に動詞（不定詞）spielen に連結しているのであるが、最後に固まっているのが核であって、gut が spielen だけを修飾するとは考えにくい。本来 Klavier は4格目的語であって、それ故 spielen は他動詞なのであるが、冠詞などを失った表現としての Klavier は副詞に近づき、一方、Klavierが4格目的語としてここに収まることで、言わば穴が塞がり全体として自動詞として働く。それを gut が外から修飾することで、gut (Klavier spielen) というこれも1つの動詞として働く。これを Klavier (gut spielen) と言うと、要素が同じなので、その意味では同じであるが、ニュアンスの違いを生じ、細かく言えば、また別の動詞である。

移動動詞と原形不定詞句の典型は、

Er geht einkaufen. 彼は買い物に行く。

である。単純な自動詞の不定詞との組み合わせが中心である。「何々しに行く」は、ほぼ gehen などの移動動詞を助動詞として使っている。これを「何かを買いに行く」にしようとする、早速困難がある。zu 不定詞句のそもそもの用法は、補足語のある不定詞句をユニットとして安全に使うためであって、単独の不定詞はzu不定詞には余りしない。この場合、einzukaufen とはしない。単純な不定詞は名詞的なのであるが、gehen は自動詞なので、不定詞は実は副詞的である。「買いに行く」という表現は、厳密に言えば、「買うために行く」ので、その表現には更に明確な副詞的用法 um ~zu--を使う。ただし不定詞単体なので、um einzukaufen は避けて、完全に中性名詞化する。それに前置詞 zu を付けて、zum Einkaufen とする。Er geht zum Einkaufen. と一応理屈上は言うことができる。イディオムがある中で、このような言い方はほぼしないであろう。ただし、「何かを買いに行く」と言う場合には、um ~zu--を用い、例えば、Er geht, um Bücher zu kaufen. 「彼は本を買いに行く。」のように言わねばならない。

本来は移動動詞は単純な不定詞と結び付いて、助動詞+本動詞関係になっているために原形不定詞と結び付くのであるが、このイディオムの延長上で、単純な目的語を取ることは許されている。Ich komme Sie begrüßen. あなたにご挨拶に参りました<sup>4)</sup>。

zu 不定詞句には「副詞的用法」と「形容詞的用法」があることが特徴であるが、「句」はそもそも名詞的なもので、原形不定詞句であると文全体に句が広がっているイメージになるが、不定詞句のある範囲内に限定するために zu を用いた。元来は前置詞句に準ずるものであるから、副詞的用法が中心ではあるが、基本的には名詞的になってしまい、副詞には umなどを装備する方策をとる。形容詞的とは、前置詞句と同じく、副詞的な「～のために」であっても、名詞に接触すれば「～のための」となるようなことである。名詞由来の形容詞も「～という」という同格的な用法から来ている。

最も一般的な「形容詞的用法」とは、不定詞句全体が同格的なパラフレーズになっているもので、

Haben Sie Lust, mit mir Tennis zu spielen? 私とテニスをする気がありますか?

この zu 不定詞句は元来「私とテニスをすること」という名詞的用法である。これが Lust「興味、その気」の同格的パラフレーズになっており、日本語の語感からもこの名詞に連体修飾的にかかっているように聞こえる。このようなものは動詞による説明が加えられる概念、Lust、Mut、Zeit のような特殊な名詞に限られる。更に厳密に言えば、本来は zu 不定詞句が直接当該名詞に連結している訳ではない。zu などの前置詞が必要である。die Lust zu ~「～に対する興味」、即ち、前置詞句の形容詞用法である。このような名詞から冠詞が消え、前置詞用法も省略し、分離動詞に向かう、動詞 haben の拡大表現になりつつある。

本来の形容詞的用法は、句ではなく zu 不定詞本体にある。不定詞とは動詞（として活用する性質を持ったもの）から動詞性を除いたものである。動詞性を除くと、その概念の塊は名詞になる。zu 不定詞は前置詞句に相当する。前置詞句の持つ性質として、副詞になり形容詞になり、格の延長として名詞にもなり得る。名詞に接続するとき、原形不定詞であると、単に隣接しているだけであるが、例えば Wasser trinken とあれば、ほぼ Wasser は trinken の 4 格目的語であって、句全体で名詞の働きと考えられる。Wasser zu trinken とすると、比率からすれば原形不定詞句と同じ名詞的用法が多いが、ミクロな形容詞的用法が見られる。英語で言えば to drink water と water to drink の違いである。zu 不定詞に対して直接目的語の関係にある名詞ならば、zu 不定詞が形容詞的に修飾できる。これも厳密に言えば、単独の不定詞であるから、一般的には中性名詞化し前置詞の zu を伴って、Wasser zum Trinken とする。更に縮約して合成語を作り、Trinkwasser となる。副詞的用法ならば、一般的には um を備えて、um Wasser zu trinken となるところであるが、無くても副詞になることはあり、いずれも形容詞としても使うことができる。

名詞＋不定詞ではまだ名詞句となることが多いが、代名詞になると zu 不定詞本体の形容詞的用法になることが多くなる。Hast du etwas zu essen? は殆どの場合、「何か食べるものがある?」である。形容詞的成分を付加する可能性のある代名詞は不定代名詞であるが、名詞などと異なり、代名詞は形容詞的なものを付加する手段が限られ、他の場合には余り見られない、zu 不定詞本体の形容詞的用法が有効であるので、ここが目立つのであろう。

Wasser zu trinken のように、動詞の直接目的語になる名詞を zu 不定詞は形容詞として修飾する関係になるので、不定詞の 4 格目的語を主語として、zu 不定詞による形容詞構文が作れる。

Das Wasser ist zu trinken. この水は飲用です。

前置詞 zu は本来目的を表すから、方向を指し示して未来志向である。形容するのは不定詞からみれば目的語であるから、受動態に相当する。また方向は包摂的に可能性を表す場合と、排除的に義務的・必然的方向を表すことがある。従って、

Der Patient ist leicht zu operieren. = Der Patient kann leicht operiert werden. その患者は簡単に手術できる。

Der Patient ist sofort zu operieren. = Der Patient muss sofort operiert werden. その患者は即刻手術しなければならない。

zu 不定詞の包括的可能性と排他的当然性に跨る含みは消えないのであるが、使用上どちらかがどうしても卓越してしまうことがある。haben+zu 不定詞を使って、目的語として使うと、

Ich habe Wasser zu trinken. 「私は飲むべき水を持っている／水を飲まなければならない」「私は飲める水を持っている」

後者の包括的な可能性は zu 不定詞の修飾対象の性質であり、そのような性質を持つからといって、主語の積極的な関与を必ずしも含意しないことがある。するとこの文の表現自体の意味が薄いことになってしまうので、この文の存在そのものが、前者の意味を指向しているとも言える。

このことは、この話題に関連する話法の助動詞の意味についても言えることである。例えば dürfen や mögen のような「してもよい」という許可系では、「してもよい」ということは、「しなくてもよい」ことを含意していて、主語の行動を全く規定していない。同じく sollen 「すべきだ」と言ってもそれは他人の意見であって、主語はしないかもしれない。

### 3. 話法の助動詞のいわゆる「陳述緩和的用法」

「陳述緩和的用法」とは、これまで縷々述べてきたように、文の主語は、不定詞の事実上の主語に止まり、(準)助動詞は、不定詞側で作られた節の外にあって文副詞的に働くタイプのことである。「してもよい」といった判断がどこかで行われている。このような判断は文の叙法である。そして文の性質を決める語の用法が話法であると暫定的に決めておいた。話法の助動詞や準助動詞の使用に典型的に現れ、全ての動詞に関わっている、叙法などのメカニズムについて、先へ進むために、ここで中間的に纏めておきたい。

全て文は何らかの「記述」であるが、大まかに捉えて、それは1人称「私」の「描写」と「表明」から出来ている。すでにここから文法現象である人称などの問題が絡んでくるが、言語が「描写する」のは3人称的な外界の事実、即ち環境や状況などである。外的事実からと内的な価値観によって「判断」が行われる。これには可能性、確率を含んだ「真偽判断」(この辺りが最も「陳述緩和的用法」に近い)と、善悪、優劣、長短、強弱、明暗などの「価値判断」が含まれる。さらに話者の「意思」、即ち意志、意図、意見、欲求、要求、命令、主張などが混合したものと快、不快の「感覚」、喜怒哀楽の「感情」、更に「内的判断」が総合されて「表明」される。これは決して言葉のこの部分が「表明」で、この部分が「描写」だと言うように分解できるものではなく、皆合わさっているものなのだが、同じ所から「表明」や「描写」を析出することは可能だろうと思う。今後このようなことを進めて行く。

— 続く —

註

- 1) 中山豊『中級ドイツ文法—基礎から応用まで—』第4刷, p106, 白水社, 2008
- 2) 前掲書, pp91-92.
- 3) 前掲書, p104.
- 4) 国松孝二(編者代表)『小学館独和大辞典』第2版, p1305, 小学館, 2000.



